



## 自著紹介

# 『パワフル・ラーニング： 社会に開かれた学びと理解をつくる』

(北大路書房、2017年5月)

深見俊崇

(島根大学教育学部初等教育開発講座准教授)

本書『パワフル・ラーニング—社会に開かれた学びと理解をつくる』は、L. ダーリングーハモンド編著の“*Powerful Learning: What We Know About Teaching for Understanding*” (2008) の全訳である。2015年に出版社と本書に関する出版の交渉を開始し、2016年度約1年間をかけて共訳者と翻訳を進めてきた。オビには、「表層的で形骸化されたアクティブ・ラーニングを超えて」とのメッセージが記されているが、本書は、世に飛び交う「アクティブ・ラーニング」を批判的に検討するために出版したものである。

ここ数年間、高等教育から初等・中等教育に至るまで、「アクティブ・ラーニング」に関する盛り上がりは凄まじいものがあった。2017年の学習指導要領改訂にあたって、「主体的・対話的で深い学び（「アクティ

ブ・ラーニング」の視点からの授業改善）」と「アクティブ・ラーニング」の表現そのものは後退したものの、約10年後の次期学習指導要領の改訂まではこの流れのまま進んでいく。

しかし、「アクティブ・ラーニング」として目にするものの大半は、児童・生徒また学生を「アクティブ」にするための指導方法や学習形態の議論に終始するものが多い。例えば、児童・生徒また学生が何らかの活動に従事したり、話し合いやディスカッションを展開したりするために何をすればよいかを紹介した授業実践の記録やマニュアル本も数多く出版されている。ところが、その内容に関して、先行研究の裏付けが怪しいものも少なからずある。

それに対して、本書は、学習科学の知見等の数百の先行研究に基づいて、指導方略、カリキュラム、評価のあるべき姿を描き出している。「ア

クティブ・ラーニング」に関する国内の文献でこれだけの先行研究を紐解いた文献は皆無に等しい。

とりわけ、「アクティブ・ラーニング」が指導方法や学習形態のレベルの議論が中心になっている中、本書は「学問」(教科)の本質から考えることがテーマとなっている。「数学教育」(第3章)や「科学教育」(第4章)が国際的にいかなる観点で論じられているかは、日本における教科教育の問題点を浮き彫りにするものでもある。

2017年の学習指導要領改訂にあたってもう1つの目玉となるものが、「社会に開かれた教育課程」である。これと直接的に関連する本書のテーマが「真正性」である。「社会に開かれた」という意味を考えるにあたって、「真正の活動」「真正の学習」「真正の評価」とは何かを理解できる具体的な事例が本書にはふんだんに盛り込まれている。「真正性」そのものは、日本でもこれまで紹介されてきた。しかしながら日本では、日常場面が設定された教材や問題だったり、校外学習や地域交流だったり極めて狭い意味で取り上げられてきた。一方、本書では「真正性」として、例えば科学を学ぶことは「科学者」と同様の活動に従事

することだと考えられている。日本でもプロジェクトベースの実践自体は存在するが、本書で実践されているレベルのものがあるかと問われれば極めて少ないと言わざるを得ないだろう。

本書の優れた点は、児童・生徒の実践の具体が見えることである。本書は、Edutopia (<https://www.edutopia.org/>) と連動して執筆されており、コラムで紹介されている実践の様子を動画で見ることができる。海外の実践を紹介する書籍や論文の多くは、言葉だけで表現されるため、実践のイメージをつかむことが難しかった。それに対して本書は、実践の様子だけでなく、扱っている教材や教室環境も映像を通して理解できる。

編訳者として力を入れたポイントが2つある。その1つが訳註である。可能な限り訳註を本文に入れており、本書の内容理解を促すよう心がけている。もう1つは索引である。本書に登場するキーワードを索引で取り上げただけでなく、それらが掲載されたページに関してはほぼすべて参照できるようにした。例えば、「カリキュラム」という言葉は本書で頻出するが、それが登場するページを網羅している。それゆえ、索引

を辿ることで、カリキュラムがどのような文脈で用いられているかを掴むことができる。

ぜひ本書を手にとって頂き、そこに広がる豊かでクリエイティブな学びの世界、子どもたちの可能性等を読み取ってもらいたい。本書を読めばワクワクするような学びの楽しさを感じることができるだろう。まさにそれが真の意味での「アクティブ・ラーニング」なのである。

